

二十世紀初頭における色彩銅版画と画商、シャルル・エッセル(1856-1931)

荒木 弘太郎 (名古屋芸術大学)

シャルル・エッセル(1856-1931)は二十世紀初頭、パリを中心に活躍したドイツ出身のスイス人画商である。彼は 1878 年からパリで活動し、フィルミン＝ディドーの職員などを経て、1897 年、ラフィット通りのデュラン＝リュエル画廊の向かいにある 13 番地に自らの画廊を開いた。その後、二度の移転をしつつ、1914 年までこの画廊は続いた。エッセルは十七年という短期間の画商としての活動を通し、自らのフランス語、ドイツ語そして英語の能力と広い人脈を生かし、1901 年にケーテ・コルヴィッツ(1867-1945)などフランスにおいてはまだ無名であった若手ドイツ人版画家達の展覧会を企画し、1904 年にはアルフォンス・ルグロ(1837-1911)の個展を開催し、主にイギリスで活躍し、自国フランスではまだ低かったこの芸術家の知名度の向上に寄与するなど、多くの実績を残した。

このエッセルの大きな業績の一つが、色彩銅版画の普及活動である。この版画技術は十六世紀から試みられ、十八世紀に一時的な流行を見るが、フランス革命以降、その制作は実質的に途絶えていた。しかし、1870 年代になってから日本の浮世絵の影響などにより、カミーユ・ピサロ(1830-1903)、メアリー・カサット(1844-1926)などにより、再び試みられるようになる。そして、1893 年、印刷業者であり、芸術家であったウジェーヌ・ドゥラートル(1864-1938)による技術革新は色彩銅版画の大きな躍進につながった。1897 年、画廊を開いたばかりのエッセルは、この「新しいジャンル」の版画に目を付け、その技術と、多くの作家とその作品の知名度を上げるべく、版元としての作品の編集、出版や画廊での展覧会の開催はもちろんのこと、自らの広い人脈を駆使し、フランス国内のみならず、ドイツやスイス、果てはハンガリーの美術館への作品の販売や寄贈、フランスやドイツにおける展覧会への協力、さらには美術雑誌『ジ・インターナショナル・スタジオ』の記事への協力といった様々な活動により、1904 年までのわずか七年の間に色彩銅版画の本格的な普及に大きな役割を果たした。

エッセルが関わった作品に注目すると、インテリアデザインで知られるフランシス・ジュールダン(1876-1958)、押絵画家のピエール＝ジョルジュ・ジャンニオ(1848-1934)、本格的にキュビズムに移行する前のジャック・ヴィヨン(1875-1963)など様々な芸術家の版画家としての知られざる側面が見られる。また、ガストン・イシェンヌ(1873-1902)などの色彩銅版画における独特なジャポニスム作品もみられる。

本発表ではフランスの二十世紀初頭における色彩銅版画を語るうえで欠かせない存在と言えるこの画商の活動の実態、彼が関わった作品群、また、当時の美術業界における色彩銅版画の位置づけなどについて、フランス国立図書館をはじめとする現地での資料研究に基づき、総合的に考察する。